

「環八郎湖」の1年／高まる流域再生への機運

谷口吉光（秋田県立大学）

今年2月の本欄に「環八郎湖」を取り上げた。これは秋田地域振興局が打ち出した八郎湖の水質改善と流域再生事業のキーワードである。ポイントは「住民参加」である。今や全国の湖沼のなかでも最低レベルの水質まで汚れてしまった八郎湖。秋田県は20年にわたり八郎湖の水質改善に取り組んできたが、残念ながら目立った成果を挙げることはできなかった。秋田地域振興局は発想を転換して、八郎湖流域の住民の知恵と行動を結集して水質浄化と流域再生が図れないか考えたのだ。

あれから1年。行政の呼びかけは確実に浸透しているようだ。「自分たちの手で八郎湖を再生できるかもしれない」という住民の期待は高まり、あちこちで新しい動きが生まれようとしている。

去る11月23日に大潟村で開かれた第3回「環八郎湖・流域の未来フォーラム」はその絶好の例だった。パネルディスカッションの壇上には周辺市町村から3名、大潟村から2名のパネラーが上がった。周辺からの3人は八郎湖土地改良区、天王町の市民団体「潟舟保存会」、八郎湖で漁業を営む八郎湖増殖漁業協同組合の代表だった。3人は干拓以前の八郎湖の思い出と八郎湖の再生にかける思いを熱っぽく語った。会場には周辺市町村から約70名と、地元大潟村の村民を合わせ約250名の聴衆が詰めかけ、皆熱心に耳を傾けていた。大潟村と周辺の住民がこれだけたくさん集まって、一緒に八郎湖問題を議論したことはおそらく初めてだっただろう。

ディスカッションの焦点となったのは、海水導入問題だった。八郎湖の漁業者はこれまでもたびたび「八郎湖の水質改善のためには防潮水門を開けて日本海から海水を導入するしかない」という主張を繰り返してきた。それに対して大潟土地改良区は「海水を入れると農業施設の腐蝕（ふしょく）がひどくなる」等の理由で海水導入に反対してきた。

今回もその問題が出た。ところが、大潟土地改良区の宮野武義理事長は海水導入にただ反対するだけでなく、対案として「農閑期に防潮水門の水位をできるだけ下げて、八郎湖の水位を下げ、八郎湖から日本海への水の流れを促進する」という提案を出した。これは海水導入論とは違うが、八郎湖での水のだよみを減らし、富栄養化とアオコの発生を抑えるという意味では同様の効果が期待できる画期的な提案といえる。現在関係機関との協議中だということだが、ぜひ地域住民への説明会や討論会を計画し、この提案の可能性と課題を住民同士の議論の中で明らかにしてもらいたい。

ただ、八郎湖をきれいにしたいという思いだけが先行して、「汚れを海に流せばいい」という安易な考えになるのは今の時代絶対に通用しない。海の浄化能力も有限であり、私たちのゴミ捨て場と考えるべきではない。従って、農業排水も生活排水も、自分たちの出す汚れを最小限に減らす当事者の努力が絶対に必要である。

いずれにせよ、来年から大潟村と周辺市町村で、住民参加による「環八郎湖・流域再生」のための多彩な活動が始まるだろう。多くの方の参加と応援を期待したい。

（朝日新聞「あきた時評」 2004年12月11日掲載分を加筆・修正した）